

立てるし、最近東印度の日本商店がインドネシヤ新聞に盛んに広告を掲載する所から、東印度のインドネシヤ人新聞は日本の資金で生存して居る等と書きたたため、蘭印のインドネシヤ人の各新聞はそれぞれ社説で我々は日本商店の廣告を貰つても決してそれにより内容に影響されるものでは無い旨を強調し、ブマダガン紙の如きは「假りに東印度のインドネシヤ新聞が日本の財的援助で生存して居るとすれば、それはインドネシヤ人が東印度の新聞を生存させて呉れない證據である」と反撥した。

この日本の文化侵略のデマ記事は舊蘭印陸海軍の機關誌ヘーフト・アフトに迄掲載せられた。それ許りではないロンドンにある亡命オランダ政府の週報フレイ・ネーデルランドには「蘭印に於ける日本のスパイ網」などと言ふ記事が出て居るし、又昨年春には空軍雜誌フトマストに「日本の蘭印侵入を如何にして防ぐか」と云ふ對日海軍戰略論が出て居て、日本軍が攻めて來ると石油を海に流してそれに火を付ける珍戰術のことが書いてある。かう云ふ調子であるから酔ドレ和蘭軍人が旗を焼いたりする様な反日行爲をする様になるのであつた。

一方インドネシヤ人は一般に傳へられて居るが如く無條件的親日かどうか、たゞ他の連中

が反日であるから中立の人でも親日である様に見えるのであらう。皆が左側を歩いて居ると中央を通つてゐる人が右翼の様に見えるのと同じ理窟である。

インドネシヤ人にして見ればたとひ和蘭の蘭印支配が倒れて他の國が之に代つた所で何も恐れる必要は少しもないのである。

従つて積極的に反日行爲に出たり、親英米行爲に出たりする必要など少しもない。尤も向ふでも時局便乗家は親英米行爲に出て和蘭人の氣嫌を取つて居る者も居るが、民族意識の強い連中はそんなことはし無い。彼等は親日でも無ければ反日でもなく、たゞ同じ東洋人種である先進國日本の良い所を學ぼうとしてゐるのである。それが反日の色眼鏡をかけた連中（一部抗日蘭人や華僑）からは親日行爲とアチられ、近視眼的自稱南洋通の日本人から「土人は親日だ」と宣傳されてゐたのである。

土人等と云ふ言葉は白人が東洋人を侮辱する時に用ふる言葉だ、一九四〇年夏以來蘭印政府は訓令を發して彼等土着人のことをインドネシヤ人と公稱することを布告した位だから、

東亞の同胞を土人など言ふ言葉で呼ぶのは日本人として絶対につしんで貰ひたい。
次に華僑や蘭人の恐日病に對するインドネシヤ人新聞の反駁論二つを譯出紹介する。

X

「最近華僑新聞シン・チツ・ポー（新直報）はヤバニテイスにかかつてゐる。同紙にはバ
リンドラ黨（インドネシヤ人政黨でスアラ・ウムム新聞はその機關紙）や、スカルジョ夫
人のことに關し、日本との間に何か有るやうな攻撃記事が出てゐたが、相手にしないであ
る所遂に土着人政黨を甚だしく中傷したケシカラ又社説を數回擧げるに至つた。本紙はインド
ネシヤ人の利益を保護する必要上、この中傷記事に對して答へんとするものである。

華僑が日本を嫌つたり、抗日的態度を取つたりする氣持を、我々は了解ができる。日支は
今なほ戰を續けてゐるのだから、彼等が自國の運命に對して、非常に心を痛めるのは當然の
ことである。愛國心に對しては、我らも充分尊敬をはらつてゐる。

しかしながら、その日本嫌ひの感情が見當違ひの方面に發展して、子供が有りもしないお
化けに脅えるが如く、至る所に怪物（日本）の姿を妄想するやうになると、それは謂ゆるヤ

バニテイスに患つてゐるといはねばなるまい。インドネシヤ人の一婦人が、日本のことを賞
めれば、直にありもしないことを相像し、木の葉が落ちて雷が落ちたやうに騒ぐのは、健
全なる精神状態の人が見たら、その妄想を嘲笑されるだけであらう。

以前バリンドラ黨首だつた故ストモ博士が、日本旅行から歸國されて我々インドネシヤ人
が、日本の良い所を真似るやうに講演された時も、華僑紙はストモは日本に酔つてゐるとい
つて攻撃した。

華僑新聞のインドネシヤ新聞攻撃は、支那事變が起つて、華僑の商店や飲食店が蔣政權に
送金する目的で一齊に商品並びに飲食物の値段を上げた時、我々がこれに對して強く反對し
た時から一層ひどくなつた。たださへ貧しいインドネシヤ人が、華僑の蔣政權援助の爲に、
更に大きな負擔を蒙るやうなことは許すべきではない。幸ひこれは、政府當局が華僑商人に
對し、蔣政權援助のために物價を上げることが禁止したので、華僑紙もやがて聲をひそめて
しまつたのである。

それが今回再び度を過した反日宣傳に乗り出して來たのである。

スカルジョ氏夫人が、日本旅行中の感想をのべたり、ラティブ夫人（有名な婦人運動家）が日本觀光團の募集をしたり、東印度ハイスクールの女教員が日本見物に出掛けたり。スカルジョ氏が日支の戦に關して、支那は歐米諸國に利用されて日本と戦はされてゐるのだといつたとか云ふことだけで、直にありもしない幻を想像してどなり散らして居る。

我々はこれを悲しむ。支那本國でなく、この東印度の土地を、自分等の故郷と考へてゐる東印度産れの華僑連の指導機關であるべき華僑新聞としては、もつと萬事慎重に公正に判斷しなければならぬ。まして同じインドネシヤの土地を、自分等の故郷としてゐるインドネシヤ人に關する場合には、より充分慎重を期せねばならないのだ。

根も葉もないことを大きく騒ぎ立て明らかに或る意圖の下に、土着人の政黨のことを中傷する華僑紙シン・チツ・ポーの能度の如きは、我々と華僑との間の關係を、更に一層惡化せしめるに過ぎない。

我々は日本が過去數十年間に偉大なる發展をなし、たくみにその地位を高めたあの粘り強さを賞賛するものであるが、同時にまた商業界における華僑の努力に對してもそれを高く評

價することをおしむものではない。我々はその點を自國民も真似るべく宣傳してゐるのである。我々は科學に就ては西洋を賞め、如何なる人種をも我々の手本とすることに躊躇しない。

願はくば華僑紙よ！この記事によつて自己が恐日妄想に取り付かれてゐることに氣付き、その夢から醒める事を望むものである。』（スアラ・ウムム紙一九三九年六月二十日）

次に譯するのは一九四〇年十一月二十二日のプマンダガン紙の社説である。

東印度のインドネシヤ人新聞に日本商店の廣告が多いと言ふので、日本の廣告政策によるインドネシヤ紙買收論に對する反駁論である。同様の駁論はプマンダガン紙の他にチャヤ・テイモール、クバダナン紙其他のインドネシヤ人紙もかかかつて居た。

×

『インドネシヤ新聞の廣告の問題が新聞の話題となり、遂に人民參議會で論議せられるやうになつた。報道事業に關しては、政府はこれに援助を與へるのが當然であつて、新聞の健

全なる發達は政府自身の利益でもある。しかるに、不思議な事は蘭印政府自身が民間新聞の競争者であるといふ事だ。政府の手で出版される諸種の定期出版物が、政府の金でやつてゐるにも拘はらず、民間新聞の廣告を奪つてゐる。それどころか、官營質屋の質札にまで商店の廣告をのせてゐる有様である。

まだ世人の間には、インドネシヤ人の新聞に廣告すると品位を落すやうに考へてゐる人もあるが、かゝる誤れる考へはやがて全く拭はれてしまふだらう。最近では、インドネシヤ人の商人はつとめて自分等の種族の新聞に廣告を出すやうになつて來たし、華僑の商人はインドネシヤ新聞の廣告効果を早くから認識してゐた。そればかりではなく、オランダでも、我々の新聞に廣告して呉れる人が次第に増加して來てゐるのである。

今から十年程前に、インドネシヤ新聞の社長の専用車として一九四〇年型の新型自動車をインドネシヤ新聞社が買ひ、編輯長に政府の高官以上の月給を支拂ひ得るものと誰が想像したであらうか？

インドネシヤ新聞の發達は必然的に廣告の増加となつた。從來和蘭語新聞にしか掲載され

なかつた廣告も、現在ではインドネシヤ新聞にも出されるやうになつた。本紙の如きも華僑商人、和蘭商人、日本商人、インド商人が商業的目的でその廣告を掲げてゐる。

我々はこの東印度における總ての人種に對して、何等依怙最負なしにサービスしてゐる。良い事をして呉れた人には、我々は良い事をもつて酬ひてゐる。けれども、何か爲す所あつて、計畫的に外面上の善良さを裝つてゐる似是非親切は絶対に排撃する。もし新聞に廣告を掲載する事に依つて、その新聞の内容を左右しようと考へる人は必ず後悔するであらう。

かういふ事をここで公言せねばならぬ理由は、或る一部の新聞が何かためにする所あつてか、インドネシヤ新聞は日本の財的援助によつて生存してゐるといふやうな事を宣傳してゐるからである。日本商店の廣告がインドネシヤ新聞を埋めてゐるとか、その他全くナンセンスなデマ記事が我々の種族（インドネシヤ人）に向つて浴びせかけられてゐる。

政府は内閣情報局、インドネシヤ人局及び政治情報局（特高警察）等の諸種の機關を有してゐるから、この問題に就いて充分知つてゐるであらうから今更これ等一部反動新聞のナンセンスに對して辯解する必要はあるまい。

ところで、それ等の新聞は、一體何が目的でこんなデマを飛ばせて我々を攻撃してゐるの
だらうか？

もし假りに、インドネシヤ新聞が實際日本の援助で生きてゐるとすればそれはインドネシ
ヤ人がインドネシヤの新聞を生存させて呉れない事を意味する。

總てのインドネシヤ人は、我々の種族の新聞を援助せねばならぬ。我々の新聞は單なる營
業を目的とする商業ではない。我々是我々の民族の理想の鏡なのだ。我々インドネシヤ紙は
決して外部の如何なる者からも買収されたり、影響されたりするものでは無いといふ事をそ
の歴史が示すであらう。

金だけが目標では無い。インドネシヤ人の利害關係とインドネシヤ新聞とは切り離すこと
が出来ない。インドネシヤ人が理想を有する限り、インドネシヤ新聞はその理想を守るため
死力を盡すであらう。』

東亞共榮圈と舊蘭印政府

一九四一年一月の松岡外相の東亞共榮圈に言及する演説に對し蘭印のファン・モーク經濟相は蘭印は日本の指導下に入らない旨の發表をしたし、ジャバ・ボデーを初め蘭印の支配者である和蘭人の新聞はいづれも我が共榮圈の中に蘭印が含まれることに絶對的反對を表明して居た。

もつとも舊蘭印側が我が東亞共榮圈の一ブロックに入ることに反對を表明してゐるのは何も今に初まつたことでは無い。東亞共榮圈といふ言葉が唱へ出されて以來東印度の支配者階級である和蘭人の新聞は、いづれも絶對的に其の共榮圈中に蘭印が含まれることに反對を表明して居たが、政府（蘭印の）側としては此の東亞共榮圈に公式の反對聲明を行つたのは三國同盟成立後である。

蘭印政府の東亞共榮圈及び三國同盟に關する意向を最もよく知るために、昨年末の蘭印人民參議會に於ける舊蘭印政府の答辨を全譯する。

『日蘭會商がバタビヤ市に於て今なほ進行中でもあるし、又日蘭兩國の代表の間で交渉の結果は共同聲明の形式で發表する事に決定して居る以上會商の經過に就て詳細に説明することは出来兼ねるが、蘭印政府としては交渉の目的並びに基礎に關し其あらましを述べる事は差支へないと思ふ。

御承知の如く蘭印に關して行はれた第一回の日蘭經濟會議は一九三四年の後半期に於て行はれたのである。此會商の理由は日本からの輸入の激増と海運の飛躍による蘭印經濟界の困難のためであつた。言ひ換へれば當時の非常な情勢の變化による經濟政策上の行きづまりと日蘭兩國の貿易のバランスの變化に依るのである。この情勢の大變化は一九二九年以後に始まつた。次にこの點に就て其概略を述べやう。

統計から見れば一九二八年迄の蘭印側に有利な貿易バランスは一九二九年に至り逆轉し始めた。そして一九三三年に於ける日蘭兩國間の全貿易額の七十一パーセント迄が蘭印側の損失となるに至つた。

x

第一回の日蘭會商は其當時直に効果をあげる事は出来なかつたが、蘭印側が採用した手段のおかげで其後の情勢はやゝ安定を見た。

其後一九三七年にハルト、石澤協定が成立し、兩國間の經濟關係を増々密にせんとする兩者の希望を明らかにし、兩國間の通商の確立を計つたのであつた。日本政府はこれにより我が國(蘭印)の農産物の一部を買ふ事になつた。

其後一九三八年に於て更にファン・モーク・小谷協定が成立したが、矢張り充分満足すべき結果は得られなかつた。これは一部は一九三七年に發生した日支戰爭の影響の結果でもあらう。蘭印の農産物の對日輸出は其後全然増加せず逆に次の表が示す如く大減少を來たしたのである。(單位トン)

	(一九三七年)	(一九三八年)	(一九三九年)
砂	一七八、二二九	一四、九一四	五三二
糖	七、四三三	五、一六六	一、四三〇
コ	九三五	七二〇	五一四
カ	三、〇九八	八七八	七七六
ポ			
ツ			
ク			
ラ			
ヒ			

椰子	六五一	五八	一三六
玉蜀黍	一六七、三九五	六一、五一九	五九、七八六
材木	七三、六五五	七四、三二九	五三、九七九
樹脂	一、四六二	一、二九一	一、五八〇
籐	一、八九五	一、九七三	一、二〇六

ところで蘭印側がこの通商状態に不満である許りでなく日本側にもこの状態の改革を希望する聲が強かつた。しかし日本側が或る種の蘭印の産物の多量の買入れ希望を明らかにし、更に日本政府が一般的經濟問題に關して兩國の代表間に於て相談したいと言ふ希望を述べ來たつたので和蘭及び蘭印側に於ては、更にもつと適當な方法で相談する事が出來るとは考へたものゝ、兩國が其の代表者を出して會談する事には別に異存はなかつた。かくて去る一九四〇年九月十二日から日本代表の到着を迎へて日蘭會商が開始せられたのであるが、兩者が聲明した如くこの會談は經濟的問題にのみ限定されて居て、政治的問題は全然除外して居るのである。

各種の事情のため會談の最初の段階に於てまだ極く少しの効果しかあけて居ないから今の

所其内容を公表する事は出來ない。勿論かゝる最後の段階に到達すればやがて立ち入つた内容に就ても發表される事は勿論である。

和蘭女皇に依つて任命せられたる和蘭代表團の組織から判斷しても、此會議がロンドンの和蘭國王政府の指揮下に於て行はれつゝある事は明らかである。交渉の經過に就ては常に和蘭國王政府の指令に依つて居るのである。

そこで重要な問題は常に本國政府によつて慎重に研究されて居る。卒直に言へば日本との經濟關係を促進してもそれが敵國（ドイツ）を直接或ひは間接に援助する事にならないやうにする爲にはどうすれば良いかと言ふ問題に就て政府は充分なる検討を加へて居るのである。

例の三國同盟と稱されてゐる日本、ドイツ及びイタリヤ間の條約に就いて政府（蘭印の）はたゞ新聞報道によつてのみ其成立を知つたのである。しかし政府は直に其條約に就いて検討した。和蘭側代表は直ちに日本側代表に對して、三國同盟中に述べられて居る東亞新秩序の建設の中には蘭印も含まれて居るのかどうかと言ふ點に就て問ひたゞした。

日本側代表は、この條約は決して日本と和蘭王國の東洋に於ける部分（即ち蘭印）との從來の關係に何等の變化を加へるもので無い旨の説明があつた。即ち日本側は蘭印支配を希望して居るものではないと口頭を以て返答されたのである。

其故今回の日蘭會商はさきの三國同盟條約の影響を受ける事は無いのであるが、三國條約に於て日獨間に規定されて居る現在の關係上の密接な日獨間の關係に關しては當局は常に注意を拂つて居る。特に既に述べたが如く直接或ひは間接に敵國（ドイツ）を利するが如きおそれ有る問題に就いては更一層の注意を加へて居る。さりながら現在迄の所日本側がかゝる意圖（ドイツを利する様な）を有するとは見えないので政府（蘭印）は更に充分の注意を拂ひつゝ會商の行進を見守つて居る。一方明らかに經濟的問題に限られた會談は進行を續けて居るのである。

蘭印政府はこの和蘭王國の土地（蘭印）に於て外國が權力を得る所の新秩序の建設を排撃する事は今更こゝに強硬に聲明する必要が無からう。同様に蘭印政府は蘭印を東亞の一經濟ブロック内にとぢ込めようとするが如き企てに對して賛成を表したり或は援助を與へる事は

出來なく。

和蘭政府にとつては蘭印に對して全面的に其支配權を今後も永久に持ち續ける事は非常に重要なことでもあるし、又戰爭によつて未だ我々との關係を切斷されて居ない世界のあらゆる國々との經濟關係を友好的に持續して行く事が必要なのである。諸外國との間の經濟的關係は出來得る限り廣範圍に何等の差別を設けずに續けて行く様努力せねばならぬ。

とにかくアジアに於ける隣邦との關係を一層促進するために經濟的方面に於ける支配權を云々する必要は無い筈である。蘭印政府は隣邦との親善を密にするために協同する必要を認めてゐる。しかしながら其のために一方だけに有利な様に要求するやうな共同行動に加擔する様な事は絶対に排撃するものである。』（蘭印人民參議會議事録）

x

以上の譯文を御覽になれば明らかな如く、日蘭會商の困難が奈邊に存したかが自から明瞭であると思ふ。和蘭はドイツと交戦中であると言ふ所に彼らは問題の重心を置いて居たと言はねばならぬ。

舊蘭印政府の反日態度は英米の煽動の結果には相違ないのであるけれど私をして言はしむれば、舊蘭印政府の最も欲して居ること、つまり當時の蘭印の支配者達の最大の希望は蘭本國の恢復と言ふことであつた。従つて現在英米がドイツと闘つてドイツを倒して和蘭の恢復に努力してゐると稱してゐたからこそ蘭印政府が親英米的態度を取つて居たのである。

それは兎も角として舊蘭印の一部和蘭人特に軍人は非常に反日的である。少くとも恐日的であつた。東印度の土着人たるインドネシヤ人は和蘭人や華僑の恐日病に對してヤパニティスと言ふ新語を用ひて居る。

東印度に於ける和蘭人の總數は僅に二十五萬に足りず舊和蘭本國を合計しても八百萬に過ぎない。一方被支配階級のインドネシヤ人は六千萬人の多きにのぼり、或る皮肉屋が和蘭人の蘭印統治を評して『尻尾が犬を掉つて居ると』言つた位である。又東印度に於ける華僑の數は蘭人よりも遙に多くて百二十五萬を數へるのである。

こゝに於て本國消夫後の東印度の蘭人のインドネシヤ人統治は相當困難を豫想されたので

あるが、和蘭人に取つて幸なことは民族運動の項でも述べた如く華僑が蘭印政府に對して忠誠を誓つて居たことである。

百廿五萬の東印度華僑の舊蘭印政府への忠誠は主として先住民に對する反感からであつて、從來華僑は東印度人と合同せんとする氣勢を示して居たのであるが、支那事變後はインドネシヤ人が全然反日的な態度を取らず傍觀して居るのを見て、インドネシヤ人は日本と怪しい關係にあるとか色々な悪口を以て彼等を攻撃したのと、華僑の蔣政權への獻金が貧しきインドネシヤ人の金を外國へ持ち出すと言ふ土着人側の非難の結果兩者の反目は非常に強くなつて居る。

蔣介石はいはゞ英米の同盟國なのだから英國に避難して、對獨交戦を繼續中の和蘭ウイルヘルミナ女皇とも同盟者なのだ。だから東印度の和蘭人の利害と抗戰派の華僑の利害とは相一致する。蔣介石の交戦が一日永びれば日本の南進は一日遅れると和蘭人達は考へて居た。

かくて東印度に於ける華僑は舊蘭印政府の暗黙の支持下にあつて徹底抗戦を叫んで居たが、これに反しアラビヤ人がインドネシヤ人側と合同して蘭印に議會を設け自治制を確立せんと

する要求を支持して居た。

インドネシア人の新聞中でも東亞共榮圈に公然参加表明などするものは一つもなかつたが、多少でも親日的とみられる者は相當の壓迫を受けて居たことは『恐日病』に關する項に於て述べたが如くである。

インドネシア人の石油論

日蘭會商中最も重要な問題の一つとして考へられてゐる石油問題に關して、當の東印度のインドネシア人はどう考へて居るであらうか？

それを知るためにスラバヤのスアラ・ウムム紙の昭和十五年十月十五日、十六、十八、十九の四日間にわたつて連載されたインドネシア人政黨パリンドラの幹部で蘭印人民參議會の副議長タムリン氏の論説を抄譯することにする。

先に民族運動に關する項で述べた如くタムリン氏は四一年一月十一日に死亡して居る。タムリン氏の此論説はスアラ・ウムム紙に發表された後其他のインドネシア紙が之れを好んで轉載して居た。

なほ小生も直に和譯して「世界知識」に掲載したが、この小生の譯稿が上海租界内で發行されて居る重慶政府の御用新聞中美日報に一部内容をかへて再び掲載せられて居た。

x

『石油は戦争に缺く事のできない重要物資である。さきの世界戦争が終つた時、英國のロイド・ジョージ氏は「我等は石油のおかげで勝つた」といつた。また戦争中にフランスのクレマンソーは米國のウイルソンに向つて「フランスにおいては石油の一滴は血の一滴に等しい」といつて、速かに石油を送ることを乞ふた。

現代において最も大きな働きをしてゐる武器は、何といつても飛行機であらう。毎日我々は新聞紙上で、如何にそれが重大な且つ有力な武器であるかを讀んでゐるのである。ドイツ及び英國では最近、毎日六十乃至七十臺づゝの飛行機を製作してゐるといはれる。

そして、その飛行機を動かす物は石油の他には無いのである。

これだけいへば、石油の重要さを認識させるには充分であらう。そこでその石油の産出國としての東印度が、現在太平洋上で如何に重要な地位を占めてゐるかに就いて語らう。

東印度はキナ、胡椒、コブラ、ゴム、茶、錫等の物産をもつて世界産業界に重要な地位にある。東印度よりも多く石油を産する國は世界中でただ米國、ソ聯、ベネズエラ及びイランの四ヶ國に過ぎない。一九四〇年八月九日號のエコノミッセ・ウエークブラット誌（蘭印政

府の經濟週報）によれば、一九三八年の蘭印の石油の全産額は七、三九七七七四メトリック・トン（一メトリック・トンは千キログラム即ち約二百六十貫）であつた。かくて、蘭印の石油の産額は逐年増加しつゝある。

鑛物局の統計によれば、一九二二年における産額は三、〇六六、一六一メトリック・トンであつたが、一九三六年には六、四三六、八八二トンにまで増加してゐる。一九三八年の産額は既に記したので、如何に蘭印石油産額が毎年増加してゐるかは諸君が御覽になる通りである。

一九三六年においてジャバ島から産出された石油の總額は、ドイツ全土の石油産出額よりも多く、ポーランドの産出額に相當したのであつた。スマトラのパレンバン地方からのみ出した石油量でも南米のコロンビア國の全産額に匹敵した。

ジャンビー地方の産油額は英領北ボルネオの産額に等しく、ボルネオの産額は英領植民地中、最大の油田たるトリニダッド島の産油額と殆んど同じであつた。この他に東部スマトラ、アチエ、セラム（モルツカ群島）からも産する。ニューギニヤに石油があるか、どうか

は目下調査中であるが、既に油田を発見したといふニュースも傳はつてゐる。

地中から採集した原油は、精製しなければ使用にたへないといふが、ただボルネオのタラカン附近から出るものは精油せず、原油のまま船を動かすのに使用することが出来るさうである。精油工場も大きなものが各地にできてゐるが主なものを拾ふとバレンバンのスゲイ・ゲロン及びブラジュ、ボルネオのバリクパバン、東スマトラのパンカラン・ブランドン及びスパン・ジュリギ、それからジャバのチュプー及びウオノクロモ等である。マウトネル博士の報告によれば、スマトラ産の石油には三〇乃至四〇パーセントのベンジンを含んでゐり、世界中でも珍らしい品質の良いものであるといふ。これに比べて、米國の石油の如きは二〇パーセントぐらゐしかベンジンを含んでゐない。

ところで、これ等の蘭印石油を支配してゐる人は誰であらうか？

一九一二年以前、蘭印の全石油はコニンクルツク・マーツスハツペイ・トットエクスプロイターシー・ファン・ペトロレウムブロンネン・イン・ネーデルランス・インデイ(普通BPM社といはれてゐる)及びシエル・ユニオン・オイル・コーポレーション(普通シエル社

といはれてゐる)の二大石油會社によつて独占されてゐたのであつた。この社を合せて、コニンクルツク・シエル・グループと世人は呼んでゐるが、二社とも東印度以外の世界各地に子會社を多數有し、世界的の大會社であつて、これ等會社の資本金は十億ギルダ(二十億圓)を越え前者はオランダの所有で、後者はイギリス人のものである。

コニンクルツク社(BPM社)を支配してゐるのはオランダの富豪ケスレル、ストーブ及びファン・レーウエンの三家で、この三家は石油の他に銅鐵、セメン、銀行等の事業に多額の投資をしてゐる。ポリテイク・エン・キルツール誌に依れば、これ等三大オランダ・コンツェルンの投資額はケスレル、ストーブの兩家が九億ギルダ、レーウエン家が七億ギルダに及ぶといはれてゐる。

一九一二年になつて、前記二會社の他にネデルランス・コロニアレ・ペトロレラム・マーツスハツペイといふ會社ができた。會社の名もオランダ語だし、社長もオランダ人だが、その實権は米國のスタンダート石油の手に握られてゐる。この會社の設立によつて、米國が蘭印石油分割に割込んで來たのである。この會社はジャンビーの油田を手に入れんと欲したが、

そのため米國政府と蘭印政府との間に紛争が起き、一九二七年に至つて米系のこの新會社がパレンパンの油田を獲得するに及んで争ひは解決した。

一方ジャンビーの石油田は蘭印政府自からネデルランス・インデツセ・アールドオリ・マツスハツペイ(NIAM社)を作つて採油を始めた。

石油の重要性の故に、各國資本のそれ等諸會社は結局、自國の政府の爲に働いてゐるのだといふことができる。假りに米國系の石油會社に妨害を加へれば、直ちに米國政府が動き出すのだから、石油問題は一商事會社の問題ではなくて、常に政府と政府、國と國との紛争なのである。

現在、蘭印石油を支配してゐるのは蘭、米、英の三國であつて、數億ギルダの投資をしてゐるのだから、この事業が妨害を受けたら、黙つてはゐないだらうことは容易に了解される。必要とあらば彼等は腕力に訴へてもその權益を守るだらう。

ところで現在、東印度の石油利權が何處からか妨害を受けてゐるであらうか？ これに答へる前に、もう一度石油は近代戰遂行上缺くべからざるもので、各國はそれをできるだけ多

く手に入れるために、全力を盡してゐるといふことを繰返して置く。

日本は樺太及び滿洲から出る石油だけでは到底その需要を充たすことはできないのである。更に戰時における石油の需要は、平時の三倍位になるのであるから、國內消費だけでは使ひ切れない蘭印の石油を、日本が買はうとするのは當然といはねばならぬ。

恐らく米國が日本を壓迫する程度に従つて、石油問題の日蘭會商中におけるその重要性が決められるのであらう。米國は日本が東亞の現状を變更するならば、石油を禁輸するぞと脅迫してゐたのだから。

もし米國が石油を禁輸すれば、日本は他の國にそれを求めねばならぬ。そして差當り東印度以外には無い。距離は近いから輸送は樂だし、しかも東印度では石油は餘つてゐるのだ。

かう考へて來れば、石油が日蘭會商の最重要問題となつてゐるやうに考へられる。もし、さうとすれば蘭印が日本へ石油を賣れば良いでは無いか？ 買ひたがつてゐる者に賣るのが何故悪いのであらうか？ ところで石油賣買は他の物品の商取引と違つて、さう簡單には行かない。誰が賣り、誰が買ふかといふことが重大問題なのである。石油の賣買には常に國家

の利害關係が緊密にからみついてゐる。

故に日蘭會商における石油問題は、兩國民の非常な注目を引きつゝあるのであるが、兩國とも自國の利益を守るために全力を盡してゐるのであらう。なにしろ石油問題は重大な政治的結果を招來するものなのだから。

日蘭會商の石油問題の結果について豫言することは困難である。我々は双方の側が満足するやうな一致を見ることを望んでゐる。しかし兩國とも自國の利益を守るためには死力を盡すであらうことだけは間違ひあるまい。』云々。

X

なほもう一つ今度は和蘭人側の石油論を紹介することにする。この譯文の原文は四〇年九月のジャバ・ボード紙に出たものである。

X

『日蘭會商に於ける石油問題は、相當困難な問題であるけれども、日本側では大して厄介な問題とも思つてゐないやうだ。東京に於ては蘭印の油田は全部蘭、英、米の會社の所有で

あつて、日本は其中、割込む機會が無いと言ふやうな見方をしてゐる。日本の新聞紙は常に英米の石油業者は蘭印で大きな勢力を有して居て、日本が蘭印で勢力を得る事を極力防害してゐると書いてゐる。

かう言ふ考へ方が所謂今回の石油會談の核心となつてゐるのであらう。蘭領印度自身は、經濟的には大きな勢力を有して居るけれども、政治的觀點よりすれば殆んど無力に近い。

日本人方面では、現在蘭印には英米が非常な勢力を有してゐるがこの英米勢力は、日本がまだ經濟的に發展しなかつた以前に、蘭印に植え付けられたもので、今や日本も經濟的に發展せねばならぬと言ふやうな見方が行はれてゐる。

現在の蘭印の石油會社はもとは全部和蘭の所有であつた。しかし後に資金の必要上から國際的資本の會社となつたのである。一九〇六年コンケルツク社とシエル石油會社、とが協同で仕事を初めた時はまだ僅に輸入に於て一・二%、輸出に於て四・四%を占めるに過ぎなかつた。そこで日本として、解決せねばならぬ種々な問題が起きて來たので石油問題が浮び出て來た譯である。日本が大發展を遂げたのは一九一四年から一九一八年に至る前の世界大戰

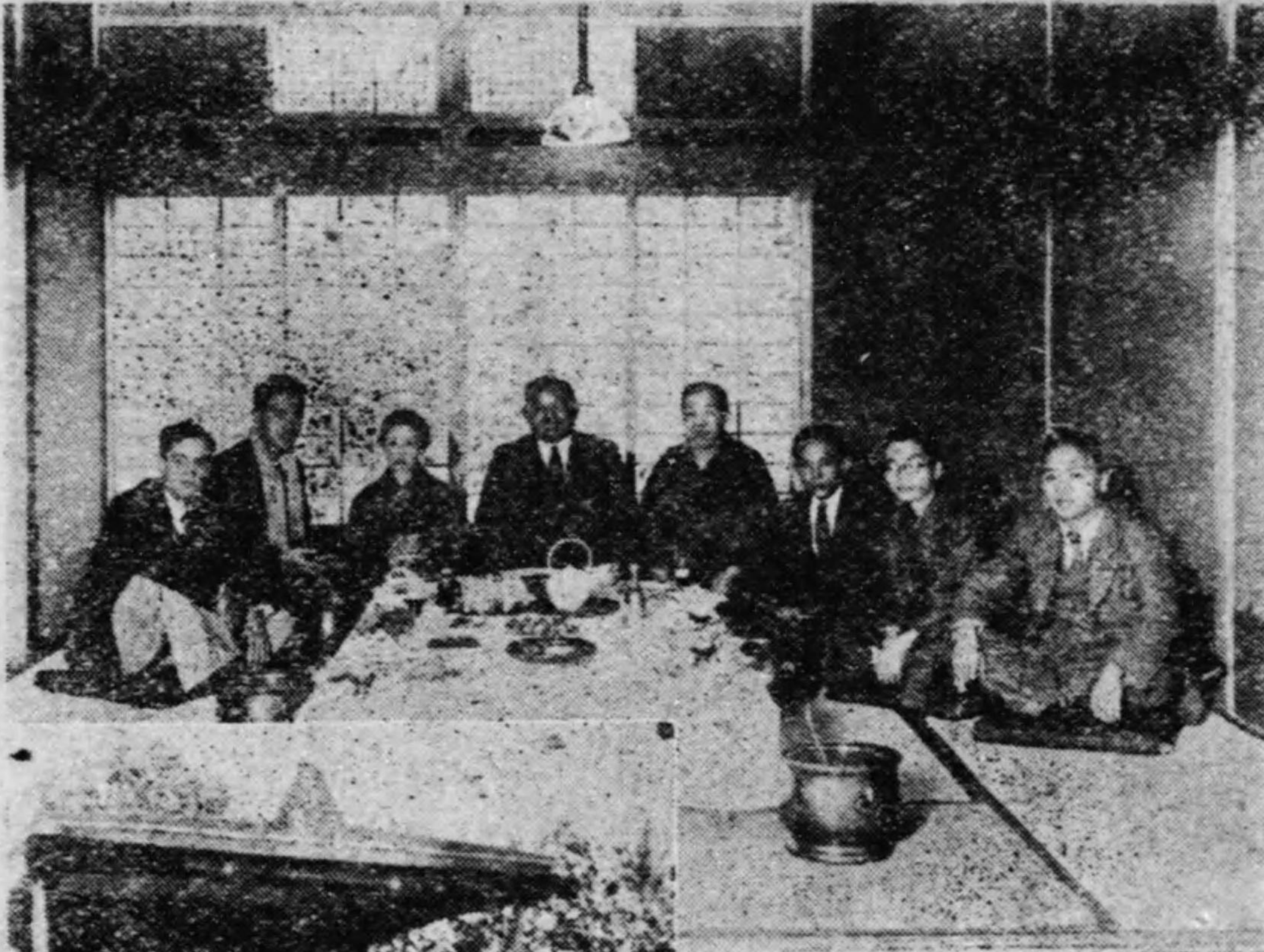
の時であつて、その後日本は石油の必要を感じ其重要性を認識するに至つた。

従来、蘭印に於ける石油争奪戦は和蘭と英米資本との間に行はれて居たのであるが、現在の問題は日本側の要求を充す餘地がなほあるかどうかと言ふ事である。

日本は蘭印の石油企業に参加し得る権利をドイツの所謂『レーベンスラウム』に基いて要求してゐるのである。日本は強國として石油が必要である。この事を以て日本は蘭印に於ける石油を所有する権利ありと認めて居るのである。

一方蘭印にある國際的石油コンツェルンは、永年の間絶えず調査並びに努力によつて、今日の勢力をきびきび上げたのである。従つて、云ひ換へれば、彼等は彼等の資本並に努力によつて、其所有権を得てゐるのである。

然らば石油問題に對して蘭印政府は如何なる態度を取るであらうか？ 蘭印人の社會はそれ等石油業の利益の中出来るだけ多くの部分が蘭印の社會に落ちるやうな會社を組織する事を希望して居る。石油を掘り出して海外へ持ち去る事は蘭印の有する地下の富を持ち去る事ではあるが、それと同時に外國資本を蘭印に持ち込むと言ふ利益がある。利益金の分前を貰



(上) 元ピンタン・テイモール紙社長パラダ・ハラハブ氏が昭和八年第一回觀光團をつれて來朝した時の寫眞筆者の自宅で寫す中央がパラダ氏右から二番目著者インドネシア人の日本留學はパラダ氏の提唱により始まる
(下) 爪哇にて馬車に乗る著者

ふとか、それ等會社に社會事業的な施設を行はしめるとか、特別の税金を課する等の手段によつて、外國人の金を蘭印に入れる事が出来るのである。
かゝる經濟的な立場から考察すれば、蘭印に石油採掘を營むものは如何なる國の人

であつても差支はないのである。アメリカの會社でも又日本系の會社であつても構はないのだ。たゞその場合我々は油田の家主であるのだから、出来るだけ多くの利益を家主に支拂ふ借家人に借す事が望ましい。

ところで最近の傾向として石油問題を論じる場合それが必然的に政治問題となる傾向がある。のみならずさうした政治問題は必ず軍事と關係があり、世界各國は各々石油貯藏に躍起となつてゐる有様である。

日本も矢張り御他分に漏れない。日本自身は石油資源に乏しく、戦争に於ては石油は重大な影響を有してゐる。従つて現在日本は、アメリカ及び蘭印から多量の石油を輸入してゐる。日本が蘭印の油田に手をつけやうとするならば、我々は日本が資本を下ろして石油採集並びに精油の仕事を當蘭印に於て、蘭印人を使つてなす事を希望するものである。

然るに我々の知る所では、日本には之等石油の精油を日本に於て行はうと言ふ希望を有してゐるものがある様である。蘭印の油田から原油を採油して、それを直ちに日本へ運び、日本内地で精製しようとしてゐるらしい。だが、さうした日本側の希望は明らかに石油田を

所有するところの蘭印人の希望とは相反するものである。この事に就いて何とかして兩者の間の妥協をつける方法を見付けなければならぬ。蘭印政府は石油問題に基因する紛争をつとめて避けやうとして居るし、また他人の困難に際しては出来るだけの援助をあたへて、其困難を少しでもやはらげやうとするのが蘭印政府の傳統的な政策なのだ。

更に蘭印政府の立場としては、かつて一度石油採掘の許可を與へた外國會社との間の契約を守り、且つ當地の人民の利益をも保護せねばならぬ義務がある。

あらゆる方面から見て蘭印政府當局はこの問題を友好的に解決しやうと言ふ希望と欲望を抱いてゐるやうだ。日蘭の兩方とも百パーセントの満足を得る事は困難かも知れぬが、何とかして此問題から生ずる危険を避けることが出来れば、當地の人人の喜びはこれに過ぎるものはなす。

跋

宮武正道君はインドネシヤを愛し、インドネシヤ人を愛し、マレー語を愛する。異なる民族の理解は異なる民族への愛情を豊かにする者がよく爲し得るところである。インドネシヤを語る日本人は尠くないが正當に評價してゐる者は稀である。最近の日本の新聞雑誌に同君が語るインドネシヤの記事と共に同君の寫眞を掲載するものがある。日本の新聞が同君に注目するよりも早く爪哇のインドネシヤ人の新聞がミヤタケ・セイドーに親しみ同君の日本紹介記事を貴重なものとして扱つていた。インドネシヤ人が日本の知己として信頼を寄せていたのであるから之をもつてしても同君のインドネシヤに就ての知識の廣さが知れるであらう。本書は大東亞戦争前に執筆されたものであるから印刷中に若干文書を訂正せねばならなかつたと云ふ。併し戦争によつて東印度も轉換することになつたが民族の傳統は切斷されるものではないが故に本書は大東亞戦前のインドネシヤ人の動向を明らかにしたのもとして興味を持

たれる以上に、東印度の民族を理解するに適當な内容を持つたものとしての生命がある。
 亞細亞民族研究會の名に於て跋を附する所以である。

昭和十七年三月蘭印陥落の日

左 山 貞 雄

昭和十七年五月一日初版印刷
 昭和十七年五月五日初版發行

(3000部)

インドネシヤ人の文化
 定價 壹圓五拾錢

(出文協承認)
 (ア 30009 號)



著 者 宮 武 正 道
 著 者 松 本 善 次 郎
 代表者 松 本 善 次 郎
 會員番號 第一一六五〇二番
 發行 者 大 同 書 院
 印刷 者 大 同 書 院
 配 給 元 日本出版配給株式會社
 東京市神田區淡路町二丁目九番地

發 兌

大阪市北區
 會 根 崎 上 三
 電 報 掛 號 大 一 六 五 三 一
 電 話 掛 號 北 一 六 五 三 一
 東 京 市 神 田 區
 發 河 臺 三 丁 目
 電 報 掛 號 東 一 一 二 三 八
 電 話 掛 號 神 田 二 八 二 二 八

大 同 書 院

(部本製刷印同大)

東京帝大前教授 矢内原忠雄著

帝國主義下の印度

附アイルランド問題の沿革

A列5判 定價二・五〇 送料・二二

植民地の社會的發展の一切は統治國の植民政策に依りて、一定の方向に或は促進せられ或は阻害せられること大なるは言ふを待たない。而して印度は世界最大植民國の統治する世界最大の植民地として、この問題の研究に豊富にして且つ重要な資料を提供する。本書は印度經濟の發達（若くは不發達）は英國の政策に何を負ふか、又逆に印度經濟の發展は英國の印度統治政策に如何なる變更を要求せるかを論じたもの。

好評五版

黃警頭著 大川周明序
左山貞雄譯

華僑問題と世界

價一・七〇円・一四

華僑問題は昨今の日本に於て旺んに論議される様になつた。新聞雜誌に取扱はれ或ひは單行本となつて現れている。今後も尙一層華僑問題は論議されるであらう、併し今後は常識的な論議ではなく政策上の重要問題として、より本格的に検討されるであらうことが想像される。南洋に於ける華僑の經濟勢力の根強さ、それが如何にして築造されたか、南洋統治國との政治的關係或は土着人との經濟的繋り、中華民國との政治經濟的結合等々に就ては過去の問題であらうが、今後の論議は實踐的問題を祖上にするにある。

東京 大阪
大同書院發行

35.3. 8



¥ 1.50